

第13回京都建築賞 <藤井厚二賞部門> テーマ意見交換会

日時 令和6年12月12日

出席 審査委員 (50音順) 奥谷 繁礼、服部 大祐、松隈 章
顕彰制度特別委員会 篁、藤原

奥谷: 前回のテーマが「やぶる」でしたが、今年もどこか突き抜けてるとか、何かチャレンジングな建築の応募が多いと良いのではないかなと思っています。第7回で木村松本さんがhouse A/shop Bで受賞した時は、完成度という点では他の作品で完成度が上まわっていたものがあつたのですがどちらにしようかとなった時に、僕と満田さんと前田さんで話しあつてその作品はすごく良かったんだけど、何か新しいチャレンジがあるかという点で、藤井厚二賞の意味ということ考えると木村松本さんの作品だなとなりました。藤井厚二賞でなく京都建築賞だったら結果は違つたかもしれない。

松隈: 服部さんは藤井厚二に対してどういうイメージを持っていますか？

服部: 聴竹居に寄せていただいた時のイメージが強いのですが、当時からすると考えられないような実験的な建築を作り上げていて、それが今の建築に対しても良い影響があるように思っています。

松隈: 実験という言葉が出てきましたが最近、僕はよく藤井について環境とか実験という言葉を外して欲しいと言っています。大学の授業でだいたい環境やつた人によって言われてしまう。藤井自身は環境という言葉や実験という言葉もつかっていないんです。この2つは、後の人が藤井にレッテルを貼つてしまつていると思っています。

あくまで藤井は建築家であつて、欧米から入つてきた洋館とか折衷の建築とか、そういうものが耐えられなくて、日本の住宅を根本から作り直そうとしたつていうのが本来なのだと思います。藤井の中で最上位のコンセプトとして「愉しく暮らす」つていうのがあつて、100年前にやっぱり日本人としてどういう暮らしが一番愉しいか、そのためにおさえとかなんといけなかつたことの中に環境もあつたというだけのことです。

さらに、家事労働が楽になるように設計しないと愉しく暮らせなかつたでしょうということをやっている。その上で建物は大きければいいというわけではないと考えていて、コンパクトに住むということをやつているので、家族5人プラス女中をいれて8人で暮らすための大きさとして聴竹居というの



はいかに小さくできるか、さらにお金が余ったら設備にお金かけろ、ということ言ってるので、環境とか実験とかということではないという、そのことだけはリセットしておきたいなと思っています。

服部: それを聞いた上でもやっぱり実験だと僕は思います。建築家である以上、そういう暮らしを刷新するだったりとかそういったことも含めて実験と捉えられるのではないのでしょうか。

梶谷: 松隈さんが実験という言葉を外したいのは何ですか？

松隈: 藤井の言葉の中にない実験住宅として藤井は建てたって書いてあることが多いのですがそれは違うと思います。

梶谷: 藤井厚二が自分では実験と言ってなかったとしても、それが実験であるというふうに捉えられることはまずいですか？

松隈: 実験という言葉をつかってないのに言ってラベルつけてしまうのはまずいかなと思います。

梶谷: 建築家である以上、自分が望んでないラベルがつけられることはもうありえるかもしれない。僕なんかは町家建築家って言われがちですが、最初はそういったラベルをつけられるのが嫌だったけど、今はどうでもよくなりました。

松隈: 一方的にステレオタイプに言われるのは嫌じゃないですか。

服部: 実験という言葉でなかったとしても良くしていく、チャレンジしているのは確かはずです。決して全体がうまくとっていきことだけがいい建築じゃない。ある意味ではアンバランスであってその中のギリギリのバランスを探ることによって、そこにしかない建築をつくる可能性があったりするのではと思っています。ギリギリのところで崩れずに均衡を保っている感じを、言葉にできるといいなと思いました。例えば、揺らぐみたいな言葉でも良いかもしれない。

梶谷: 前は「やぶる」というテーマでしたが引き続きもっと「つきやぶる」ようなものを期待しています。

松隈: だけど一方で藤井がやろうとしたのは当たり前をつくるってことなんですよ。だからスタンダードのレベルを上げたいっていう意識もあるので、極端すぎるのもどうかと思うんですよ。

梶谷: スタンダードというテーマはすごく共感できるんですけども小さくまとめたものが出てきちゃいそうな気がします。スタンダードをつくると言っても、新たにスタンダードをつくる手前ではやっぱりつきやぶらないとつukれないですからね。

松隈: だから新しいあたりまえみたいな話だけどそれはそうするけど、常識にとられるなっていうのも藤井のメッセージではあると思うんですよ。

梶谷: 藤井厚二賞に関しては新しいものがつくれたかどうかは分からないけども、新しい普通を作るための新しいチャレンジをしているものも評価したい。多分、それは京都建築賞では評価しにくいと思うんですね。

服部：審査する側としてはふわっとした建築を審査するのは僕はやり方が分からないので気合の入った作品を緊張しながら 5 つぐらい巡りたいですね。

梶谷：いままでの「なし」を一度言葉で書きだしてみると「せとぎわ」、「緊張感」、「気合い」、「熱量」とかですかね。あと「執着」とかどうでしょうか。藤井厚二とも繋がるような気がします。



服部：「執着」良いかもしれないですね。

松隈：「執着」ですか。それだったら「こだわり」とかはどうですか？

梶谷：「こだわり」があるのは普通ですが、狂気じみたこだわりみたいな感じが「執着」にはありそうですね。

服部：狂気とかだとちょっと引いちゃいそうですが執着はいいんじゃないですか。誰の何に對しての執着かで作品のはばや答え方も広がりそうな気がします。

執着がないと色々な意見を取り込んでいく中でバランスをとってどんどん凡庸な建築に向かっていく。建築をやってる以上、どうしても建てたいし、もちろん役に立ちたいし、どこかでバランスを取らなきゃいけないっていうのは分かっているんだけど、でもどうしても抑えきれない執着みたいなものがあるから、ギリギリの線で捨てられないものと妥協してもいいところのバランスを取っていったものができあがったときに、そこにどうしても実現したかったものみたいなものが、空間に立ち現れてくるのだと思います。つきやぶっていく建築をつくる上では執着があるということは必須だろうなと感じています。

松隈：言葉の意味としては結構ネガティブで微妙な言葉なんですよ。

服部：下手したらマイナスに転ぶということも含めてそのバランスがお題として面白いなと思います。

松隈：「執着」だけでいいのかなって気がするんです。「執着」だけだとちょっと引かかります。基本的に「執着」という言葉はネガティブな意味が強いからそれがなんか嫌なんですよ。

梶谷：何かつけたらポジティブにできないですかね。例えば「突破する執着」とか「つきやぶる執着」とかはどうでしょうか？

松隈：ただ「つきやぶる」だと前回のやぶると少しかぶっていますよね。つきぬけるではどうでしょうか？「つきぬける執着」。

梶谷：良いと思います。

服部：大丈夫です。お題を渡された時に一瞬考えそうですね。何に執着してるのかというのは、自分の建築における一番のコアが何なのかを考えるきっかけにもなるので賞に応募すること自体が自分の建築を振り返って考えるきっかけになると思います。

梶谷：何に對しての執着か考えることで応募できる作品の幅も広がりそうな気がしますね。